

三島作品における女性像

—その重要性をめぐる研究動向を中心に—

李 佳 炫*

(e-mail : uka83@hotmail.com)

< 목 차 >

- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1.はじめに | 2) 中間小説的な作品に限定される傾向 |
| 2. 三島文学の女性登場人物—「怪物」 | 4. 女性登場人物を中心とした三島文学研究の必然性 |
| 3. 女性登場人物をめぐる三島文学研究の動向 | 5. おわりに |
| 1) 男性人物たちのジェンダー意識を中心とする傾向 | |

キーワード：三島由紀夫(Mishima Yukio), ナルシシズム(Narcissim), 男性文学(Male literature)、女性像(Female characters)、怪物 (Monstrous)

1.はじめに

三島由紀夫は『仮面の告白』（1949年）、『金閣寺』（1956年）などの作品で知られる小説家であり、『サド侯爵夫人』、『鹿鳴館』など劇作家としても有名である。またスター作家としてマスコミでも大いに活躍し、文筆活動以外でも、映画の出演・制作、対談およびインタビューでの大胆な発言などによって注目される人物であった。また、ボディビルを皮切りにボクシング、剣道などスポーツの世界ともかかわっており、自らを被写体とする写真集まで発刊している。1964年のオリンピック東京大会では特別取材記者を勤めるなど、多彩な活躍をみせた作家である。しかし、次第に右翼思想に傾倒し、陸上自衛隊に体験入隊、民間防衛組織「楯の会」の結成など世間の耳目を引く行動の末、1970年11月25日には陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地で衝撃的な割腹自殺を遂げる。この異様な死は各方面で物議をかもし、戦後の一つの光景として日本社会に深く刻印され、日本国内ばかりでなく外国にまで話題をまいた。

* 筑波大学、人文社会科学科博士課程、日本文学・文化専攻

この事件はあまりにも強い印象を与えたため、多くの三島研究が作家三島の「死」を究明する方向に向けられてきた。三島の死後今日に至るまで次々とその評伝¹⁾が出版され、三島の作品はもちろんのこと、晩年の政治的な言動を含む三島の言動すべてを彼の死から遡及して考察し、死を予言するものとして捉えてきたのである。

あまりにも有名な作家である三島だけに、これまで多くの学者による活発な研究がおこなわれており、三島とかかわる膨大な研究成果のすべてを簡単にまとめることは非常に難しい。しかし、これまでの研究においては、作家三島とその作品に表れた彼の思想の關係に着目し、最終的にはその「死」の理由を考察するような研究が主流であったと大まかにいうことができる。三島の成長背景（生まれて早々に母親の手から離され、祖母の元でいわゆる「おばあちゃん子」として育てられたこと）や彼の芸術論、また作品の美意識を考察するこれらの研究は、結局のところ三島の死に収斂する傾向があるということは否定できない²⁾。

たとえば、二・二六事件外伝として書かれた作品である、割腹自殺を遂げる士官の事件を描いた「憂国」（1960年）を論じるにあたって、田中美代子は「作中人物に対する作者の距離は縮まってゆき、傍観者から当事者」³⁾の位置に作者が次第に移行していくと述べ、割腹自殺を遂げる武山中尉に感情移入する作家三島の姿をみている。また、松本道介はこの短編小説を「まさに三島事件の予告のようなもの」⁴⁾と語り、作品と三島の死を直接に結びつけて論じている。三島本人の死と絡めて作品を論じるこれらの研究において、主な分析対象となされてきたのが作者と同性の男性登場人物であったことはいうまでもない。しかし、ここで注目すべきは、「憂国」では割腹自殺をする武山中尉という男性以外に、妻である麗子も自ら死に至ることである。中尉の死の後に設定された麗子という女性の死は、これまであまりにも容易に見すごされてきたのではないだろうか。

1) 三島についての評伝としては次のようなものがあげられる。ジョン・ネイスン(1976)『三島由紀夫—ある評伝』(野口武彦訳、新潮社)、佐伯彰一(1988)『評伝 三島由紀夫』(中央公論社)、村松剛(1990)『三島由紀夫の世界』(新潮社)、奥野健男(1993)『三島由紀夫伝説』(新潮社)、猪瀬直樹(1999)『ペルソナ—三島由紀夫伝』(文芸春秋)、橋本治(2002)『「三島由紀夫」とはなにものだったのか』(新潮社)、岡山典弘(2014)『三島由紀夫外伝』(彩流社)など。

2) たとえば、西尾幹二(1971)「「死」からみた三島美学」(『新潮』、新潮社、1971年1月号、pp.222—230)、森本哲郎(1971)「哲学的会見—死に至る論理」(『新潮』、新潮社、1971年1月号、pp.231—243)、磯田光一(1974)『殉教の美学』(冬樹社)、佐藤秀明(2000)「ナルシズム」(松本徹、佐藤秀明、井上隆史編『三島由紀夫事典』、勉誠出版、pp.542—544)、山中剛史(2000)「美」(松本徹、佐藤秀明、井上隆史編『三島由紀夫事典』、pp.567—570)などの研究があげられる。これらの研究は三島作品に表れる「美」、「ナルシズム」、「精神論」などさまざまなテーマを彼の死と関係づけながら論述している。

3) 田中美代子(1980)「憂国」、田中美代子編『鑑賞日本現代文学23 三島由紀夫』、角川書店、p.158。

4) 松本道介(1992)「『憂国』」、『国文学 解釈と鑑賞』、至文堂、1992年9月号、p.87。

実際、「憂国」だけでなく三島文学において、「死」とかかわる女性は少なくない。実は男性人物より女性人物の方が「死」とかかわっているのではないかと考えられるほどなのである。「憂国」以外で、作品中で男性が死に至るのは『禁色』（1951～53年）と『午後の曳航』（1963年）程度しか見当たらない。それとは対照的に、女性の場合では自殺か他殺によって直接に死とかかわる例も多くあり、さらに中絶や出産という経験を通して間接的な死を経験するなど、さまざまなケースが表れている。

無論、作品の登場人物と三島本人の姿を直接的に連結させた前述のような研究に重大な不備があるわけではない。それは、三島文学を理解するためには必要不可欠な観点であり、これからの三島文学研究にとっても土台になる視点を提供してくれるものであることは間違いない。しかしこれらの研究が一様に持っている方向性が、三島作品を読むにあたって固定観念として作用し、広い視野からの読み方を妨げることも事実であろう。すなわち三島文学は総体として「男性の文学」、「男性的な文学」として捉えられてきたのである。この強固な伝統は今日に至るまで支配的であり、三島の作品は男性主人公を中心に研究され、またナルシズム、ミソジニー、精神論、美と死論、ニヒリズム論などがいずれも男性的テーマとして設定され、議論が積み重ねられてきた。その中でも、三島文学の最大のテーマとしてこれまで繰り返し論じられてきたのがナルシズムの問題、より正確に言えば男性主人公によって表される男性のナルシズムというテーマである⁵⁾。

この男性「ナルシズム」が三島文学最大の問題として熱心に探究される過程で、そのほかのテーマがここに飲みこまれ、また看過されるという現象が起きてきたことは否めない⁶⁾。作家を投影した三島文学理解、そして（男性）ナルシズム論を焦点とする三島研究の動向によって見落とされることになった、あるいは少なくとも研究が手薄なままに残された

5) たとえば、奥野健男(1954)「三島由紀夫論—偽ナルシズムの運命」(『文学界』、文芸春秋、1954年3月号、pp.138-154)、遠丸立(1976)「三島由紀夫のナルシズム—『豊饒の海』を中心に」(『国文学 解釋と鑑賞』、至文堂、1976年2月号、pp.30-37)、許昊(2004)「三島由紀夫の文学とナルシズム—『禁色』を中心に」(『世界文学比較研究』第11巻、世界文学比較学会、pp.229-249)などの研究をあげることができる。

6) たとえば、荒正人(1949)「異常心理でない」(『図書新聞』、1949年7月23日付)、野坂昭如(1987)『赫突たる逆光—社説：三島由紀夫』(文芸春秋)、井上隆史(2008)「『禁色』論—「精神性」の喜劇と芸術至上主義」(『三島由紀夫研究⑤ 三島由紀夫・禁色』、鼎書房、pp.50-65)などをあげることができる。これらの研究からは、男性同性愛の問題がナルシズム論に吸収される傾向があったことや、男性ナルシズム論という巨大なテーマがホモセクシュアリティというある種の男性性の議論の発展を妨げている構図を見出すことができる。

重要な問題は数多くあろう。そのなかでもきわめて重要で、大きな問題圏をなすと思われるのが女性登場人物からみる三島文学という観点である。

したがって本論文では、三島文学の真髄をさらに掘り下げる試みの土台として、これまで十分な研究がなされてきたとはいえない女性登場人物たちに焦点を当てた研究作業がいかにかに重要であるかについて検討したい。三島文学に繰り返し現れる主体的で支配力をもった強烈な女性登場人物たちに目を向けたときに見えてくるのは、男性に注目するのみでは気づくことができなかった三島作品における男女間の新たな構図であり、作家と女性人物との新たな関係であり、文学を通じた三島の人間探究の新たな次元であり、また戦後という時代と作家との新たな対峙のあり方である。

女性登場人物という観点から三島文学を捉えなおすことによって、これまで蓄積されてきた三島研究の土台の上に立ちつづも、いまだ議論されることのなかった三島文学のダイナミズムを明らかにし、作品それぞれが提起しているものを見直すことが可能になると考えられる。

2. 三島文学の女性登場人物—「怪物」

三島文学にとって女性たちがいかに重要な存在であるかは、主要テーマと目されてきたナルシズムの問題を考えただけでも顕著に浮かび上がる。なぜなら三島文学全体を見渡せば、特異な形で、また傑出した形でナルシズムを顕現するような女性登場人物が数多く指摘できるからである。「獅子」（1948年）、『女神』（1954～55年）、「班女」

（1955年）などの、とりわけ短編や中編の多くの作品において強烈な自己愛的人格が女性を通して表出されていることは、三島文学の一つの大きな特質として指摘できる。しかもそうしたナルシスティックな女性たちは、自己愛を極端な形で発展させた非常に個性的な人物として造形されている。社会規範をも大胆に逸脱するほどの、三島自身の表現を借りて言い換えれば、「怪物」⁷⁾的なそうした女性たちは、三島文学におけるナルシズムを研究する際に、真剣な検討が不可欠の重要な存在であろう。

7) 他人を不幸にすることを生きがいとする主人公と彼をめぐる人間関係を描いた「怪物」（初出『文芸春秋』1949年12月号別冊、『三島由紀夫全集』第3巻、新潮社、1973年）という題名の短編があり、ほかにも三島は「只ほど高いものはない」（1952年）という戯曲作品に対する自作解説において「ひでといふ怪物的女性」という説明をしている。短編小説「鍵のかかる部屋」（1954年）においては、「この女中を怪物だと感じる」と直接に「怪物」という表現を使っている。

こうした「怪物」的な女性たち、それは男性側からの一方的な視線によってことさら「悪女」として強調されている場合も多くあるのだが、このような性質を持つ女性が三島文学において繰り返し登場する理由はいかなるものであろうか。それは果たしてこの作家の傾向といわれる「女性嫌い」の資質のみに還元されるべきものなのだろうか。またそうでないとすれば、こうした女性像を描く作家三島の意図はいかなるものであろうか。本研究の出発点となるのがこれらの問いである。

ナルシズムを体現すると見なされてきた男性登場人物たち（例えば、『仮面の告白』の私、『禁色』の悠一、『鏡子の家』の舟木収など）よりもさらに一層強烈なナルシズム、もはや情緒的で微温的なニュアンスのある「ナルシズム」という言葉を越えるほどの強い自己愛、自己執着、自己意識を備えた女性たちが三島文学の世界にきわめて頻繁に現れることは驚くばかりといえる。しかも、三島の描くこうした悪女たちは、その醜悪さによって単に否定されるだけの存在とはとてもいえないような手のこんだ描かれ方をしている。彼女たちは、一面においてはみな意志と行動力に満ちた「主体的」な女性たち、非凡で魅力的な存在でもある。また、その多くは美しくて家柄も良く、いわば先天的に恵まれた環境に加え、決断力や有能さをも備えている。作品内の人間関係においてこうした女性たちは、他の登場人物を何らかの意味で「支配」する力を行使する。こうした支配力は男性登場人物にはほとんど見られないか、あるいは薄弱な形でしか見られないもので、女性に託されたこうした力が作品をどのように成り立たせ、展開させているかを分析することで、三島作品の意義やその問題意識の理解を多くの点で更新できるはずである。

3. 女性登場人物をめぐる三島文学研究の動向

女性登場人物という観点からの三島文学研究といえば、フェミニズムの視座からの研究が代表的であろう。現実においては極端にまで女性への嫌悪を表した三島の発言は、女性蔑視といった三島文学への評価へとつながり、自らフェミニズムの格好の敵であるようなイメージを作家が作り上げたきらいがある。こうした中でおこなわれてきたジェンダー論の立場からの三島研究の特徴として指摘できるのは、作家の生い立ちや時代背景から作家の意

図を探るような既存の作家論から離れ、社会的・文化的な要素をも取り入れてテキストに接近しようとしたことである。

1) 男性人物たちのジェンダー意識を中心とする傾向

これらの研究には二つの傾向がみられる。一つは、三島作品を男性文学として読んできた既存の三島研究と同じように『仮面の告白』、『禁色』や『金閣寺』（1956年）を分析対象として取り上げ、そこに現れる男性人物たちのジェンダー意識にフォーカスを合わせる傾向である。

たとえば、渡辺みえこは『女のいない死の楽園—供犠の身体・三島由紀夫』⁸⁾において、『仮面の告白』や『禁色』など三島の代表的な作品の分析をおこない、作家三島にみられるジェンダー・アイデンティティとセクシュアリティにまつわる懊悩とその克服、そして挫折の道程を追っている。渡辺は、三島が女性への嫌悪や蔑視をさまざまところで書いていることを指摘しながら、これは男性である三島が父権社会の仲間入りをしたときから、人間＝男性になるために必要なことだったのであり、三島は自己の反対像として女性を必要としたのだと分析している。また、それが作品においても反映され、女性人物の存在は男性人物のジェンダー・アイデンティティの確認手段として脇役に限られている、と渡辺はみている。

一方、より緻密な議論をジェンダー論の問題意識から重ねている有元伸子は「三島由紀夫文学における性役割—男性性を中心に」⁹⁾において、早い時期から三島文学に押しつけられてきた「男らしき「牡の文学」のイメージ」¹⁰⁾について反論を提示している。有元は三島文学について「母性思慕の神話と裏はらな女性嫌悪の思想が貫かれ」¹¹⁾しているという評価に疑問を呈し、三島文学の中の女性像を高く評価してきた田中美代子（特に論文「三島文学の女性」¹²⁾）と同じ立場を示している。しかしながら、有元が分析対象に

8) 渡辺みえこ(1997)『女のいない死の楽園—供犠の身体・三島由紀夫』、現代書館。

9) 有元伸子(1992)「三島由紀夫文学における性役割—男性性を中心に」、『金城国文』第68号、金城学院大学国文学会、pp.15-37。

10) 神西清(1974)「ナルシシズムの運命」、『批評と研究 三島由紀夫』、芳賀書店、pp.9-23。

11) 水田宗子(1982)『ヒロインからヒーローへ—女性の自我と表現』、田畑書店、p.61。

12) 田中美代子(1971)「三島文学の女性」、『ロマン主義者は悪党か』、新潮社、pp.48-60。また、田中美代子(1980)『鑑賞日本現代文学23 三島由紀夫』、角川書店、pp.175-188。田中はこの研究において、三島の短編作品「鍵のかかる部屋」（1954年）の女性人物に注目し、三島文学の女性を、他者化した作者自身

取り上げるのもやはり主に『仮面の告白』と『金閣寺』といった男性を特権的主人公とする定番の研究対象であり、議論のテーマも三島文学における男性性のあり方である。有元の展開する男性のジェンダーのゆらぎについての議論と、その不安定さから何とか逃れようともがいていく男性人物の分析はきわめて興味深く、本論文の議論の重要な土台となる観点も提供してくれる画期的なものであるが、あくまでも男性像の研究にとどまるものである。

また、富岡多恵子は上野千鶴子、小倉千加子とともに『男流文学論』¹³⁾において、男性作家に内包された性差別的な発想を暴きながら三島由紀夫を「男流」作家として位置づけ、彼の作品『鏡子の家』(1958年)、『仮面の告白』、『禁色』をめぐる座談をおこなっている。ここでは、「女ぎらひの弁」¹⁴⁾や「作家と結婚」¹⁵⁾など三島のエッセイに言及しながら、強制的異性愛社会における同性愛や結婚の問題が議論されている。具体的には、結婚後「子どもがほしい」ために劣等な生き物だと思っていた女性に高級な個体である男性自身の一部を仕方なく差し入れるというその不愉快を三島が抱いていたことに富岡は着目する¹⁶⁾。「女ぎらい」でありつつも「子どもがほしい」という三島の論理矛盾を通して彼の死と結婚生活との関係性を指摘していることが興味深い点の一つではあるものの、こうした三島の論理的矛盾の指摘が作品の具体的な分析には繋がらず、男性の女ぎらいと男性同性愛を同じ線上に置くにとどまっている。

他にも、李惠慶による「三島由紀夫と「ホモソーシャル」な欲望—ジェンダー・パフォーマンスを中心として」¹⁷⁾や吉川豊子による「ホモセクシュアル文学管見」¹⁸⁾などの研究においても、三島文学におけるジェンダーやセクシュアリティの問題は男性のそれに集中して議論されている。これらの研究の主な目的は、男性人物間のホモソーシャルな関係や男性の抱くホモセクシュアルな欲望の検討であり、女性人物の存在は無視されるか、あるいはこうした男性人物同士の連帯のために必要となる補助的な存在として捉えられるのみであった。以上にあげたジェンダー論の観点による三島研究は基本的に男性ジェンダー論であ

と見ている一方、『仮面の告白』に表れる聖母崇拜を指摘している。この研究では、聖母的な側面のみが強調されるものの、三島文学の女性像に着目している点には注目すべきである。

13) 上野千鶴子、小倉千加子、富岡多恵子(1997)『男流文学論』、筑摩書房。

14) 三島由紀夫「女ぎらひの弁」(初出『新潮』1954年8月号)、『三島由紀夫全集』第26巻、新潮社、1976年、pp.411-417。

15) 三島由紀夫「作家と結婚」(初出『婦人公論』1958年7月号)、『三島由紀夫全集』第28巻、新潮社、1975年、pp.368-377。

16) 前掲書、上野千鶴子、小倉千加子、富岡多恵子(1997)、p.369。

17) 李惠慶(2001)「三島由紀夫と「ホモソーシャル」な欲望—ジェンダー・パフォーマンスを中心として」、『日語日文学研究』第38輯、韓国日語日文学学会、pp.233-252。

18) 吉川豊子(1992)「ホモセクシュアル文学管見」、『日本文学』第41巻、日本文学協会、pp.93-103。

り、これらにおいてもまた女性人物は議論の外に置かれてきたといえる。

2) 中間小説的な作品に限定される傾向

一方、まだ数はさほど多くないものの女性登場人物に着目してジェンダー論の観点から三島文学を掘り下げる研究も存在する。こうした研究のもつ特徴的な傾向としてあらかじめ指摘できるのは、その分析の題材が、中間小説的な作品として分類されるものに限定されてしまう点である。女性人物を研究対象に取り上げる際、従来の研究においてはなぜか三島文学の中心と目されるような代表作に手がつけられることはなかった。また議論の方向として注意しておきたいのは、そうした研究においても女性人物は重要人物とはいえ主体的な人物ではなく、男性（を中心とする制度）の下に置かれた消極的な存在としてしか見られていないことである。明確にフェミニズムの立場に立ちながら女性登場人物を議論の主題に取り上げているこのような三島研究としては以下のものがあげられる。

水田宗子は『ヒロインからヒーローへ—女性の自我と表現』¹⁹⁾において、女性が制度によって長い間社会生活の上で差別を強いられてきたことから、男性が創り出してきた女性像とは、「まさに支配者＝差別者の論理（その倒錯をも含めて）」²⁰⁾を表現してきたと述べている。したがって、女性が文学上の女性像を受容することは、支配者の論理にしたがって自らを確認し形成していくことを意味するという。文学が女性差別に加担してきたのは、まさにこの点、すなわち文学の男性中心的な性質が女性自身の意識を形成してきたという点である。水田はこのように文学そのものがジェンダー的にきわめて偏った媒体として機能してきたことを確認したうえで、文学上の女性像を見ていくためには、「制度として女性を見る視点」と「女性の自我の表現という視点」という二つの新しい視点が必要であると主張している。特に、「自我を持つ個人として女性を捉える視点」こそ、近代文学を読み直すにあたって必要とされる視点であると述べ、文学作品における女性像の重要性を主張している点で水田の議論は本研究の観点にとって貴重な先行研究である。

また水田は、具体的に三島作品の検討をもおこなっている。水田は、三島の1957年の

19) 前掲書、水田宗子(1982).

20) 同上、p.21.

発表作品『美德のよろめき』を姦通小説として分析し、この姦通小説の特徴を「作者が姦通夫人を自己の分身と見て、そこに自己表現を託している点」にみるとともに「姦通夫人に対する感情移入の仕方が、自己嫌悪と肯定をこめた複雑な構成を持っている」と論じている。この着眼点は非常に示唆に富んだ重要なものであり、作家のいわば分身としての側面を持つ女性主人公の特徴や、彼女の複雑な二面性についてのこの見方を裏づける論証をおこなうとともに、より詳細な作品分析と考察が必要であろう。なお、通常、姦通のモチーフを用いた観念小説では、姦通を成り立たせる条件、すなわち、姦通が背徳であり制度違反であることが小説のシチュエーションとして揺るぎない前提とされるが、水田が強調するのは、『美德のよろめき』ではそういった状況が設定されていない点である。しかし、その理由をヒロインに精神が欠如している点に求めていることについては、以降の研究において反証したい。いずれにしても三島が『美德のよろめき』において、このヒロインを通して姦通がそれ自体ではすでに背徳になりえないことを描き、姦通小説という小説のサブジャンルを終結させた、と水田が結論づけていることは興味深い。ただし水田の議論は、姦通が背徳による官能の高揚をもたらす精神的行為の代替となりえず、単に快楽の追求となったとき、姦通という文学的テーマは意味を失ったとするものであり、また水田は三島作品におけるヒロインの知性や精神についてほぼ全面的に否定している。すなわちヒロインを、空しい快楽を求めるだけの無意味な人間とみなしているのである。結局のところ、三島文学に表れる女性像を真剣に掘り下げる余地のない対象とみなしているものといえよう。

斎藤美奈子は『妊娠小説』²¹⁾において、何らかの意味で望まない妊娠を描いた小説がブームとなる中でこれを「妊娠小説」と名づけ、その台頭および変遷の道程を、妊娠中絶、ウーマンリブ、あるいは「僕小説」の興隆といった社会的な変動と関連づけて論じている。特に、前述の水田の研究でも取り上げられた三島の『美德のよろめき』を姦通小説と位置づけ、「太陽族」を生んだ石原慎太郎の1955年作品『太陽の季節』に対するパロディ性を指摘し、ヒロインが死ぬというストーリーをとらなかったことを強調している。斎藤は、他の妊娠小説では見られないヒロインの自信と余裕を指摘しながら、一つの小説で三度も妊娠するヒロインの特殊性を述べている。姦通という点に議論を集中させた水田の分析に対し、ヒロインの妊娠、中絶までを視野に入れた斎藤の分析は（三島）文学上の女性像の研究に

21) 斎藤美奈子(1994)『妊娠小説』、筑摩書房。

新しい接近法を提示してくれる。なぜなら、斎藤はこの観点によって、個人に生じる出来事を社会的な文脈の中で分析し、その関係の中で論じているからである。しかしながら、斎藤の研究目的は三島文学の探求ではなく、斎藤のこの著作の主題である「妊娠小説」としての特徴のみを『美德のよろめき』に見ようとするものである点は認識しておかなくてはならない。

一作品のみでなく、より広範に三島の作品を分析対象に入れたフェミニズム的文学研究をおこなった武内佳代は「性規範からの逸脱としての『純白の夜』『恋の都』『女神』『永すぎた春』—1950年代の女性誌を飾った三島由紀夫の長編小説」²²⁾において、従来の三島文学研究においてほとんど言及されていない三島文学作品と女性読者の関係について論じている。武内は、1950年代に女性誌に連載された三島作品のいくつかを取り上げ、女性の純潔や貞操といったロマンチック・ラブ・イデオロギーに依拠した女性の性道徳の問題を分析している。そして、50年代の三島が女性誌での連載小説において、女性の恋愛・婚約・結婚・夫婦生活という、恋愛から幸福な結婚へといたるプロセスのいずれかを主題化しており、また、それらに疑義を投げかけていくという試みを、女性読者に向けて意識的、積極的におこなっていたことを指摘している。

これらの研究は、いずれも文学作品一般における女性像の検討の必要性和重要性を認めてはいるものの、水田の研究がその典型例の一つであるように、三島作品を対象にする際には、ヒロインについて、精神が欠如し、自我を持たない、単に（家父長制の下に置かれた）従属的な人物として解釈するばかりである。ここにはやはり、暗黙のうちに三島の女性蔑視発言を三島作品のヒロイン像に反映して捉えようとする傾向があるといえそうである。また、すでに触れたように、いずれの先行研究においてもその分析対象作品は、『美德のよろめき』や『純白の夜』（1950年）、「女神」（1954～55年）といった、中間小説的なものと位置づけられている三島の作品に限られていることがいえる。ここにも、女性が中心となる作品は三島文学の中でさほど重要でないものとして扱われてきたことが読み取れる。

4. 女性登場人物を中心とした三島文学研究の必然性

こうしたフェミニズムの視座からの三島研究は、伝統的な三島文学研究とは非常に異な

22)武内佳代(2011)「性規範からの逸脱としての『純白の夜』『恋の都』『女神』『永すぎた春』—1950年代の女性誌を飾った三島由紀夫の長編小説」、『ジェンダー研究』第14号、東海ジェンダー研究所、pp.115-137.

る方向性を有しており、「男性文学」として捉えられがちな三島作品の読みを広げる視点を提供してくれるものであることを改めて確認しておきたい。また、これらの研究がいずれも三島文学の人物像を社会的、文化的な文脈から捉えようとしていることも事実である。しかしながら、これらの研究は部分的な考察としてのみおこなわれてきていたため、女性という観点からの三島文学研究を統合し、その共通点を検討する作業が必要となってくる。膨大な三島研究の蓄積があるとはいえ、作家三島の作品数を考慮すれば、これまでの研究を総合してもまだ十分であるとはいえない。新たな三島像、また、三島文学の全体像をつかむためには、短編作品や中間小説と位置づけられてきたもの、また戯曲作品までも三島文学の重要な要素として視野に入れた総合的な視覚の検討をおこなう必要がある。そして、それを可能にするのが女性人物に対する分析を中心に据えた三島文学への接近法ではないだろうか。というのも、これまで三島研究史上、主な分析対象とされてきた長編小説の中では脇役として周辺化されていた女性人物も、短編や戯曲などの作品においては、ヒロインとしてテキストの中心に存在するからである。一方、三島文学においては人物間の関係性が非常に重要であり、その中で個々の人間が自我を追求していくパターンが多くみられるが、見逃されてきた作品群（そこに登場する女性人物像についてもまた、看過されてきたといえる）の検討を通してこそ、三島文学の人物像の分析が完成されると考えられる。また、この作業は、一つ一つの三島作品の位置づけを再検討し、その全体を再編成することにもつながるだろう。

ここで、補足的に駒尺喜美の研究に目を向けたい。三島文学研究ではないものの筆者があえてこの研究にここで言及する理由は、駒尺がおこなっている分析視点とは逆のパターンを用いて三島文学の男女の支配関係や女性像を論じうると考えられるからである。彼女は『魔女的文学論』²³⁾において、近代詩や夏目漱石作品を主にフェミニズムの視点で読み直し、「男の人生は国、社会、仲間、仕事、遊び、家、妻、恋と広く開かれている。が女はその男に養われて生きるようにしむけられ、家の中に閉じ込められている」と言及している。つまり、女はそのように閉塞的な状況におかれているがゆえに、女の情熱、生命力はたった一人の男に向かってのみ吹き出すと論じており、このいびつな男と女の関係構造の不当さに駒尺は注目している。だが、まさにこれとは逆のパターンが三島文学における女性には観察されるといえる。三島文学の女性たちもまた同じように、家庭内に閉じ込められて

23) 駒尺喜美(1982)『魔女的文学論』、三一書房。

閉塞的な状況におかれてはいるものの、自分の情熱や、生命力を男性だけに向けることはない。むしろ彼女たちは自己への沈潜を通した、自己成長の過程をたどるのである。特に駒尺が注目している恋愛の中での男女の関係さえ、三島文学では逆である。駒尺の分析によると、「恋愛」において主動的な役割を演じるのは女性であるが、それは女性が「日陰者」だからである。男ではなく、社会的な位置を持たないために、女が真正面から恋愛に取り組むことが当然であるとされる。すなわち、結局のところ恋愛関係においても男は支配者であり与える側であるという。しかし、三島文学を詳細に検討することによって見えてくるのは、男女の恋愛関係の中では、女性こそが支配者であり、男性は常に与えられる側に立っているということである。現実の近代社会とは逆のパターンといえる支配的な女性と従順な男性が三島作品においては描かれているのである²⁴⁾。

こうした描き方への考察を通して三島の各々の作品に対する新たな解釈を可能にするのみならず、近代人間のあり方について文学的な模索を試みた作家三島の意図を探ることができる。三島文学を議論するにあたって女性登場人物を中心にしなければならない理由がここにあるのである。

5. おわりに

本論文では、女性人物に焦点を当てて三島文学を考察する重要性について論じてきた。まず本論文の研究作業を支えてきた三つの疑問を改めて提示しておこう。

第一にあげられるのは、三島文学においては悪女、とりわけ読者がシンパシーを抱きにくい女性が多く登場するのはなぜなのかという疑問である。これについては、女性蔑視的な発言やエッセイなどに表れる作家三島の女嫌いといった女性観²⁵⁾と深く関係するものと考え

24) たとえば、「獅子」(1948年)『禁色』(1951-53年)『沈める滝』(1955年)などの作品を挙げることができる。

25) 三島は、「女ざらひの弁」(『三島由紀夫全集』第26巻、新潮社、1975年)、「好きな女性」(『三島由紀夫全集』第26巻、新潮社、1975年)、「女の友情について」(『三島由紀夫全集』第25巻、新潮社、1975年)、「私の永遠の女性」(『三島由紀夫全集』第27巻、新潮社、1975年)などで、女性を精神が欠如した男性の従属者と見なす、自分の女性観について描いている。

のが一般的であろう。しかし、三島の描くこうした女性たちは行動力に富んだ、能力の高い、魅力的な存在でもある。女性を「劣等」な者、また、男性の「従属者」であると見なす三島の女性観とは相反して、作品において女性たちは優れた人間として描かれているのである。こうした二面性を持つ女性像が描かれていることをふまえると、三島文学を男性中心の文学と捉えるのは偏った見方なのではないかという第二の疑問が生じてくる。さらに三島の作品では男女の対比が明確に描かれている例が多い²⁶⁾ことも重要であり、そうした作品では女性たちと比べて男性たちは存在感が薄い印象があるのではないか。これが第三の疑問である。

このような疑問に対する答えを得、それによって三島文学を新たに捉えなおすために、本論文が課題としているのは、女性が主人公または中心的な役割を果たしている三島の作品を取り上げることである。この方針に立ってみると、必然的に、短編小説が重要な作品として視野に入ってくる。短いゆえに人物設定が単純な短編作品においては男女の対比がよく見られ、女性像がより浮かび上がってくるからである。また、女性なくしては成り立たない男女の関係を扱う作品を重要な研究対象とすることとなり、「中間小説」として位置づけられる作品が視野に入ってくることになる。そしてまた、戯曲作品も重要な作品として研究対象に入ってくる。台詞を通して表現される文学ジャンルである戯曲において女性たちは、読者ないし観客を含む他者に向けて自分の考えおよび内面を言葉として表明する。つまり、積極的な自己表現によって戯曲作品においては女性像がより鮮明に強調されるからである。加えて、これまで多くの先行研究が対象としてきたいわゆる本格長編小説も新たな観点から再検討することが必要となってくる。たとえば、三島の代表作の一つと見なされる純文学作品『禁色』も女性人物たちを中心に据えて論じ直すと、従来、男色文学として読まれてきたこの作品においても強力な影響力を持つ女性たちの姿が読みとれるのであろう。

女性登場人物という観点から三島文学を捉えなおす作業を通して、さまざまなジャンルとさまざまなタイプの作品を視野に収めた総合的な三島文学の研究が可能となるであろう。女性像を中心とする検討は、必然的に男性人物とのかかわりや同時代の現実社会との関係についても考慮することとなり、三島文学を読むためのより多角的な視点を提供する。本論

26) たとえば、「葵上」（1954年）、「禁色」、「愛国」（1961年）、「十日の菊」（1961年）などの作品を挙げることができる。

文の冒頭で確認したとおり三島の死生観との関係からも考察すべき課題であり、今後の三島文学研究に欠かすことのできない主要な観点にほかならないことを確認して本論文の結びとしたい。

【参考文献】

- 荒正人 (1949) 「異常心理でない」、『図書新聞』、1949年7月23日付
- 有元伸子 (1992) 「三島由紀夫文学における性役割—男性性を中心に」、『金城国文』第68号、金城学院大学国文学会、pp.15-37.
- 磯田光一 (1974) 『殉教の美学』、冬樹社
- 井上隆史 「『禁色』論 — 「精神性」の喜劇と芸術至上主義」、『三島由紀夫研究⑤ 三島由紀夫・禁色』、鼎書房、2008年、pp.50-65.
- 猪瀬直樹 (1999) 『ペルソナ—三島由紀夫伝』、文芸春秋
- 李恵慶 (2001) 「三島由紀夫と「ホモソーシャル」な欲望—ジェンダー・パフォーマンスを中心として」、『日語日文学研究』第38輯、韓国日語日文学学会、pp.233-252.
- 上野千鶴子、小倉千加子、富岡多恵子 (1997) 『男流文学論』、筑摩書房
- 岡山典弘 (2014) 『三島由紀夫外伝』、彩流社
- 奥野健男 (1954) 「三島由紀夫論—偽ナルシシズムの運命」、『文学界』、文芸春秋、1954年3月号、pp.138-154.
- 奥野健男 (1993) 『三島由紀夫伝説』、新潮社
- 駒尺喜美 (1982) 『魔女的文学論』、三一書房
- 斎藤美奈子 (1994) 『妊娠小説』、筑摩書房
- 佐伯彰一 (1988) 『評伝 三島由紀夫』、中央公論社
- 佐藤秀明 (2000) 「ナルシシズム」、松本徹、佐藤秀明、井上隆史編『三島由紀夫事典』、勉誠出版、pp.542-544.
- ジョン・ネイスン (1976) 『三島由紀夫—ある評伝』野口武彦訳、新潮社
- 神西清 (1974) 「ナルシシズムの運命」、『批評と研究 三島由紀夫』、芳賀書店、pp.9-23.
- 武内佳代 (2011) 「性規範からの逸脱としての『純白の夜』『恋の都』『女神』『永すぎた春』—1950年代の女性誌を飾った三島由紀夫の長編小説」、『ジェンダー研究』第14号、東海ジェンダー研究所、pp.115-137.
- 田中美代子 (1971) 「三島文学の女性」、『ロマン主義者は悪党か』、新潮社、pp.48-60.
- (1980) 『鑑賞日本現代文学23 三島由紀夫』、角川書店、1980年、pp.175-188.
- 遠丸立 (1976) 「三島由紀夫のナルシシズム—『豊饒の海』を中心に」、『国文学 解釈と鑑賞』、至文堂、1976年2月号、pp.30-37.
- 西尾幹二 (1971) 「「死」からみた三島美学」、『新潮』、新潮社、1971年1月号、pp.222-230.
- 野坂昭如 (1987) 『赫突たる逆光—社説・三島由紀夫』、文芸春秋
- 橋本治 (2002) 『「三島由紀夫」とはなにものだったのか』、新潮社
- 許昊 (2004) 「三島由紀夫の文学とナルシシズム—『禁色』を中心に」、『世界文学比較研究』第

- 11卷、世界文学比較学会 pp.229-249.
- 松本道介 (1992) 「『憂国』」、『国文学 解釋と鑑賞』、至文堂、1992年9月号、p.87.
- 三島由紀夫 (1954) 「女ざらひの弁」、『三島由紀夫全集』第26巻、新潮社、1976、pp.411-417.
- _____ (1956) 「金閣寺」、『三島由紀夫全集』第10巻、新潮社、1973、pp.7-274.
- _____ (1958) 「作家と結婚」、『三島由紀夫全集』第28巻、新潮社、1975、pp.368-377.
- _____ (1960) 「憂国」、『三島由紀夫全集』第13巻、新潮社、1973、pp.221-250.
- _____ (1951-53) 「禁色」、『三島由紀夫全集』第5巻、新潮社、p.197.
- _____ (1963) 『午後の曳航』、『三島由紀夫全集』第14巻、新潮社、1974、pp.299-462.
- _____ (1948) 「獅子」、『三島由紀夫全集』第2巻、新潮社、1974、pp.595-656.
- _____ (1954-55) 『女神』、『三島由紀夫全集』第7巻、新潮社、1974、pp.611-734.
- _____ (1955) 「班女」、『三島由紀夫全集』第21巻、新潮社、1974、pp.297-314.
- _____ (1949) 『仮面の告白』、『三島由紀夫全集』第3巻、新潮社、1973、pp.161-352.
- _____ (1958) 『鏡子の家』、『三島由紀夫全集』第11巻、新潮社、1974.
- _____ (1957) 「美徳のよろめき」、『三島由紀夫全集』第10巻、新潮社、1973、pp.363-510.
- _____ (1949) 「怪物」、『三島由紀夫全集』第3巻、新潮社、1973、pp.483-508.
- _____ (1952) 「只ほど高いものはない」、『三島由紀夫全集』第20巻、新潮社、1975、pp.403-476.
- _____ (1954) 「鍵のかかる部屋」、『三島由紀夫全集』第9巻、新潮社、1973、pp.181-240.
- 水田宗子 (1982) 『ヒロインからヒーローへ—女性の自我と表現』、田畑書店
- 村松剛 (1990) 『三島由紀夫の世界』、新潮社
- 森本哲郎 (1971) 「哲学的会見記—死に至る論理」、『新潮』、新潮社、1971年1月号、pp.231-243.
- 山中剛史 (2000) 「美」、松本徹、佐藤秀明、井上隆史編『三島由紀夫事典』、勉誠出版、2000年、pp.567-570.
- 吉川豊子 (1992) 「ホモセクシュアル文学管見」、『日本文学』第41巻、日本文学協会、pp.93-103.
- 渡辺みえこ (1997) 『女のいない死の楽園—供犠の身体・三島由紀夫』、現代書館

논문 투고 일자 : 2018. 11. 12.

논문 심사 일자 : 2019. 01. 31.

게재 확정 일자 : 2019. 02. 01.

 <要旨>

 三島作品における女性像
 — その重要性をめぐる研究動向を中心に —

李佳炫

本論文は、三島文学の真髄をさらに掘り下げる試みの土台として、これまで十分な研究がなされてきたとはいえない女性登場人物たちに焦点を当てた研究作業がいかに重要であるかについての検討をおこなう。

三島文学にとって女性たちがいかに重要な存在であるかは、主要テーマと目されてきたナルシズムの問題を考えただけでも顕著に浮かび上がる。数多くの作品において強烈な自己愛的人格が女性を通して表出されていることは、三島文学の一つの大きな特質として指摘できる。そうしたナルシスティックな女性たちは、自己愛を極端な形で発展させ、社会規範をも大胆に逸脱するほど「怪物」として描かれている。しかし、こうした「怪物」的な女性たちは、同時に、意志と行動力に満ちた魅力的な存在でもある。そのような女性像を描く作家三島の意図はいかなるものであろうか。本研究の出発点となるものがこうした問いである。

三島文学に繰り返し現れる主体的で支配力をもった強烈な女性登場人物たちに目を向けたときに見えてくるのは、男性に注目するのみでは気づくことができなかった三島作品における男女間の新たな構図であり、作家と女性人物との新たな関係であり、文学を通じた三島の人間探究の新たな次元であり、また戦後という時代と作家との新たな対峙のあり方である。女性登場人物という観点から三島文学を捉えなおすことによって、これまで蓄積されてきた三島研究の土台の上に立ちつづも、いまだ議論されることのなかった三島文学のダイナミズムを明らかにし、作品それぞれが提起しているものを見直すことが可能になると考えられる。

 A Study of Women in Mishima Yukio's Works
 — Focusing on the research trends concerning its importance —

Lee, Ka-Hyun

This paper investigates important research that focuses on female characters who have not been sufficiently studied until now to understand the essence of Yukio Mishima's literature. The importance of women in Mishima's literature is emphasized by considering "narcissism," which has been regarded as the main theme in his writing. It has been pointed out that one of the great characteristics of Mishima's literature is that the women in many of his works express strong narcissistic personalities. These women develop their narcissism in an extreme form and are portrayed as "monsters" who boldly deviate from the social norms. However, these "monstrous" women are also attractive, determined, and active at the same time. What was Mishima's intention in drawing such female characters? This question is the starting point of this study. It is important to pay attention to the intense female characters in Mishima's literature who are repeatedly portrayed as subjective and dominant because it is not possible to pay attention only to men; it is a compositional diagram, a new relationship between a writer and female characters, a new dimension of Mishima's human inquiry through literature, and a new confrontation between the writer and the era after the war. This paper introduces the study of reclaiming Mishima's literature from the viewpoint of his female characters as a new, important approach to rethinking the general understanding of Mishima's literary works.